科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２５年５月７日現在

機関番号：17701
研究種目：基盤研究(A)
研究期間：2009 ～ 2012
課題番号：21242028
研究課題名（和文）　東南アジア古代・中世考古学の創生

研究課題名（英文）　Creation of Ancient and Medieval Archaeology of Southeast Asia

研究代表者
新田　栄治(NITTA　EIJI)
鹿児島大学・法文学部・教授
研究者番号：00117532

研究成果の概要（和文）：
東南アジアの古代および中世遺跡の調査を実施した。タイ、ラオスではドヴァーラヴァティー時代の遺跡の分布とメコン東岸への波及を解明し、アンコールがメコン東岸に波及したことも明らかにした。ベトナムではチャンパへの中国の影響が解明されたほか、中世～近世での一括出土銭の存在が確認された。カンボジアとフィリピンでは沈没船その積載物の解明が、インドネシアでは巨石記念物の分布と機能を明らかにした。以上より、東南アジア古代・中世考古学の創生が可能となった。

研究成果の概要（英文）：
We conducted field surveys of archaeological sites of ancient and medieval times in Southeast Asia. In Thailand and Laos, the surveys showed the distribution of Dvaravati sites and the diffusion of the culture of Dvaravati and Angkor Civilizations in the east bank of the Mekong. In Vietnam we confirmed how Chinese Dynasties influenced Early Champa, and the presence of the hoards of cupper coins in the medieval age. In Cambodia and the Philippines, sunken junks and their cargos of the 15th century were investigated by our members. Megalithic monuments wre researched in Indonesia. Archaeology of ancient and medieval times of Southeast Asia was created by this project.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００９年度	4,900,000	1,470,000	6,370,000
２０１０年度	3,900,000	1,170,000	5,070,000
２０１１年度	3,700,000	1,110,000	4,810,000
２０１２年度	4,200,000	1,260,000	5,460,000
年度			
総　計	16,700,000	5,010,000	21,710,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：史学・考古学
キーワード：東南アジア、ドヴァーラヴァティー、アンコール、チャンパ、一括出土銭、巨石記念物、沈没船、古代・中世考古学

１．研究開始当初の背景
(1) 東南アジアには先史時代から近世にいたるまでの多数の遺跡がある。20 世紀初頭から始まる東南アジア考古学の調査研究は、当初はアンコールなどのモニュメントおよび新石器文化が研究対象であった。

(2) 1960 年代以降、新石器時代～鉄器時代の遺跡の発掘調査が行われてきた。日本では従来東南アジア考古学の調査研究はもっぱら先史時代に集中し、歴史時代以降の遺跡はアンコールを除けばほとんど対象とならなかった。そのため、日本での東南アジア考古学研究はバランスの悪いものであった。

(3) 日本では 1990 年代以降、東南アジアで出土する貿易陶磁器への関心が高まり、またアンコール、チャンパやドヴァーラヴァティーの考古学からの調査研究も開始されるようになってきた。歴史時代の考古学への関心がしだいに高まってきたという背景があった。

２．研究の目的
日本における東南アジア考古学研究が先史時代に重点を置いてきたことから、時代を幅広く研究の対象とすること、日本での東南アジア考古学のバランスのとれた発展を期すために、歴史時代とくに東南アジア古代・中世考古学を創生することを目的とした。

３．研究の方法
(1) 東南アジア現地調査を実施し、東南アジア考古学を研究している研究者のうち、古代や中世考古学に関心を持つ研究者を糾合してチームを結成する。カンボジア、ベトナム、インドネシア、フィリピンに集中する。本研究の研究代表者、分担者、連携研究者は自分が従来研究対象としてきた地域を分担する。

(3) タイでは 6－11 世紀の古代国家・ドヴァーラヴァティーの都市の分布と特徴を把握を行うこと。ラオスにおいては従来調査が及んでいないためにドヴァーラヴァティーとクメールの遺跡の所在と文化の波及を確認すること。カンボジアではアンコール時代の金属の生産と利用、周辺海域で発見される中世の沈没貿易船の実態を把握すること。ベトナムでは古代国家チャンパの実態及びチャンパ建築にみられる中国の漢～六朝の影響がどのようなものであるのかを解明することと、東アジア諸国では類例が多いけれども、ベトナムでは従来確認できていない一括出土銭の実態を解明すること。インドネシアではティモールを初めとする島嶼に残る、いわゆる巨石記念物の分布と時期およびその機能について解明すること、フィリピンでは中世～近世において活発化する中国ジャンク船による貿易活動を貿易陶磁器およびフィリピン近海で発見される沈没船の調査によって解明すること。そのためには、各人が、自分が担当する調査地での現地調査を行う必要があった。

(4) 各メンバーは独自にあるいはチームで分担地域での現地調査を実施。新田はタイ、ラオス、カンボジア。江上はインドネシア。菊池はベトナムを中心としてタイ、ラオス、カンボジア、フィリピン。山形はベトナムを中心に、タイ、マレーシア。丸井はカンボジア。田中はフィリピン。以上の分担地域を割り振った。また関連するチュオンソン山脈長が必要な場合には、別個の地域での現地調査も実施することとした。

４．研究成果
本研究はさまざまな地域、対象分野で構成されているが、本研究により日本における本格的な東南アジア歴史考古学の創生の第一歩を踏み出したと自負している。以下、テーマ別に研究成果の概略を記す。

(1) 東南アジアの都市形成の前提と要因
東南アジアにおける都市の形成については、従来は「インド化」の脈絡から説明されることが通例であった。今回の調査研究により、「インド化」以前に東南アジア域内において活発な貿易活動が展開されており、そのことが東南アジアでの人口集積現象を起こし、それが都市となったことを明らかにした。例えば、サーフィン文化の特徴的遺物である双獣頭形耳飾りの原料である石は台湾東部豊田産のネフライトであり、これがシナ海域に広く運搬されてことが分かってきたし、マレー半島東岸のカオサムケーオ遺跡ではインド、中国からの招来品が出土し、貿易拠点が作られている。このような域内貿易活動が都市形成の最大の要因となったことが分かった。

(2) ドヴァーラヴァティー都市の類型化とその機能、成り立ちとの関係の確認
インドとの貿易の活発化に伴い、当時の交易ルートであったクラ地峡東岸に近いタイ湾西岸に都市が建設されるようになる。その後都市の建設はタイ湾東岸に、さらには内陸部へと広がる。これらの都市の成立とその都市プランとは相関関係がある。これらの都市は 3 類型に分類できる。沿岸地帯の方形希求の「突如出現型モデル」、東北タイの鉄器時代以来の自然地形に適応して環濠をめぐらせた「農村発展型モデル」、商品となる森林産物の供給地としての東北タイと、その輸出基地としての沿岸都市との間の交易ネット

ワークの結節点にできた、自然地形に適応した在来型の環濠遺跡に、人口増加に合わせてその外部に方形部分を付加した「農村発展拡張型モデル」である。これらの都市のプランは、その機能と成り立ちを示すものである。

(3)ドヴァーラヴァティーのメコン東岸への拡大の確認

ドヴァーラヴァティーはタイの古代国家というのが通例であるが、その文化的領域について今回の調査研究によって、メコン河を越えてラオスにまで到達していることが確認できた。ラオス中部、メコン東岸に位置するサワンナケート県やウィエンチャン北郊において、ドヴァーラヴァティーの特徴を有する独特のセーマ石が発見された。いずれも大形のセーマ石で、表面に仏塔と花生けのレリーフが彫刻されたものである。また、サワンナケート北郊外では環濠遺跡の中から金製クンディや三尊仏像を打ち出しした金製小箱などが出土しているほか、ドヴァーラヴァティー様式のセーマ石を確認した。

以上より、ドヴァーラヴァティー文化、および環濠集落（あるいは都市）がメコンから遠くないメコン東岸地域に確実に波及していることが明らかになった。この事実は、タイ湾岸から内陸部へ伸びた交易ネットワークが、東北タイを経由してメコンを越え、対岸にまで到達していたことを示す。従来よりもはるかに長い内陸部交易路が存在したことを想定できる。

(4)アンコール文明のメコン東岸への浸透の確認

ウィエンチャンにおいて、ジャヤヴァルマン７世時代の施療院建設に伴う碑文、バイヨン様式の仏像、ジャヤヴァルマン７世像をモデルとした仏像などを確認し、メコン東岸にまでアンコールの勢力が及んでいたことを明らかにした。サワンナケート南東郊外において正方形の環濠と土塁で囲まれたクメールの小都市と推定できる遺跡を発見した。

これらのことから、アンコール、とくにジャヤヴァルマン７世時代にメコン東岸に達したことが明らかとなった。

(5)インドネシアの巨石記念物の記録作成

ティモール島所在の巨石記念物の詳細な実測図の作成、聞き取り調査を実施して、現代でも生きているこれらの巨石記念物の機能について、重要な儀礼の場であることを明らかにした。

(6)ベトナム出土一括線の確認とその時代、性格の解明

ベトナム全域での一括出土銭は陳朝(1225-1400)から阮朝であり、南部では埋められた時期が新しくなる。この現象とベトナム人の領土拡大の動きとは相関関係にある。今回の調査研究では中部、ホイアン出土史料を詳細に検討し、開元通宝から黎朝の景興通寶であることが分かった。また、中国銭が主で(77%)、次が私鋳銭(32%)、その次が日本銭(3%)、ベトナム銭は１％にすぎなかった。私鋳銭には鄭氏が鋳造した安法元寶が多数を占めており、鄭氏とアジア海域交易ネットワークとの関係について今後検討すべき大きな問題を提起した。

(7)チャンパの地域拠点とその性格の解明

ベトナム中部、チャキウ遺跡の発掘調査に基づき、3段階に区分した。チャキウⅠa、Ⅰb、Ⅱの 3 段階である。土器と瓦の分析により、後100年前後、チャキウⅠ段階に中国系布目瓦が、3 世紀中頃、チャキウⅡ段階には布目がない瓦と六朝に起源する人面紋瓦当とが出土する。これらの遺物がそれぞれ特有の歴史を持っており、時間とともに分布域を拡大し、別の地域でも共有するようになった。チャキウ、コールイ、タインチャー、タインホーなどは、このような地域の中心として生長していったと推定できる。これらの中心的存在が同盟して関係にあったのが、中国側に林邑として意識され、さらにインドの影響を受けてチャンパへと発展していったと考えられる。

(8)カンボジアの沈没船資料のまとめ

カンボジア、コン島沖のスダイッ島沿岸において発見された 15 世紀以降の沈没船の概要を明らかにした。

(9)フィリピンにおける沈没船資料の解明

フィリピン、パラワン島南端沖にあるパンダナン島沖で発見された 15 世紀の沈没船の積載物の資料分析を行った。この船から出土した陶磁器の多くはベトナム産である。その他にタイ、中国産陶磁器が出土している。ベトナムからフィリピンへ向かう貿易船であったと推定できる。陶磁器、土器のほかに各種の金属製品が出土しているが、特に注目されるのは、60点にも登る鉄製鍋があることである。中国から東南アジアへ宋代以降大量の鉄製品や鉄素材が輸出されているが、この鉄鍋は現代の中華鍋に相当するもので、初めて考古資料からその事実を明らかにすることができた。おそらく中国南部製の鉄鍋がベトナムを経由してフィリピンへと送られていく途中だったと推定できる。出土資料は 15 世紀中葉の良好な一括資料であることを明らかにした。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 56 件）
①山形眞理子、南朝の漢・六朝系瓦－ベトナム北部・中部における瓦の出現と展開、古代、査読有、129/130 合併号、2012、241-270

②田中和彦、Archaeological Sites with Fujian Ceramics in the San Lorenzo ⅢShell Midden Site in Northern Luzon, 『台湾與亜洲－與福建文化的交流為中心』、2012、176-193、国立台湾大學芸術史研究所

③新田栄治、東南アジアの塩の文明史－タイを中心として－、東南アジア考古学会編『塩の生産と流通』、2011、95-119、雄山閣出版

④江上幹幸、インドネシア、ラマレラの伝統捕鯨文化と社会変化、岸上伸一編『捕鯨の文化人類学』、2011、102-121、成文堂出版

⑤丸井雅子、クメールの聖遺物－鋳塊（インゴット）考－、上智アジア学、No.28、2011、89-102

⑥菊池誠一、ベトナム海域の沈没船、菊池誠一他編『海の道と考古学』、2010、139-155、高志書院

〔学会発表〕（計 47 件）
①菊池誠一、ベトナムにおける水中考古学の調査と 17 世紀、東南アジア考古学会大会、昭和女子大学、2012.11.17

②新田栄治、タイ葬制の変遷、日本考古学協会第 78 回総会、立正大学、2012.5.27

③山形眞理子、ベトナム沿岸地方における鉄器時代の葬制、日本考古学協会第 78 回総会、立正大学、2012.5.27

④江上幹幸、東部インドネシアに残る、生きている巨石記念物の調査－ティモール島ラマクネン地域の事例を中心に－、日本考古学協会第 77 回総会、國學院大學、2011.5.26

⑤田中和彦、フィリピン出土の元様式青花瓷－出現と継承－、金沢大学創基 150 周年記念シンポジウム、金沢大学、2011.2.27

⑥丸井雅子、クメールの造瓦技法に関する一考察・布目圧痕をもつ瓦、日本考古学協会第 76 回総会、国士舘大学、2010.5.23

〔図書〕（計 1 件）
①菊池誠一、Nha xuat ban The gioi, Mghien cuu Do thi Hoi An, p.322,2011

６．研究組織
(1)研究代表者
新田栄治（NITTA EIJI）
鹿児島大学・法文学部・教授
研究者番号：00117532

(2)研究分担者
江上幹幸（EGAMI TOMOKO）
沖縄国際大学・総合文化学部・教授
研究者番号：30320518

研究分担者
菊池誠一（KIKUCHI SEIICHI）
昭和女子大学・生活機構研究科・教授
研究者番号：40327953

研究分担者
山形眞理子（YAMAGATA MARIKO）
昭和女子大学・国際文化研究所・研究員
研究者番号：90409582

研究分担者
丸井雅子（MARUI MASAKO）
上智大学・外国語学部・准教授
研究者番号：90365693

(3)連携研究者
田中和彦（TANAKA KAZUHIKO）
上智大学・外国語学部・非常勤講師
研究者番号：50407384